



「常盤姫物語」の発生基層

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中塩, 清臣 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00001161

「常磐姫物語」の発生基層

中 塩 清 臣

北海道学芸大学岩見沢分校国文学研究室

Kiyo-Omi NAKASHIHO :
Embryology of “Tokiwa-no-uba-no-Monogatari
(Immortal Woman Story)”

「常磐姫物語」(群書類) (従本) → 「常磐のうば」(新編御伽) (草字本) の「常磐(盤)」は、<とこいは> → とこは → ときは → ときわである(「嚶々ニ」(筆語))。「巖なす常磐にませ…」(「万葉集」卷六の988)とか、「いそべの山の常磐なるいのち…」(…卷十一) (の2444)とか、用語例をととのえるところから理解がととぐ。それに「…たながの御世と堅磐に常磐にいひまつり…」(「祈年祭」(祝詞))、と形容動詞から対句にしてゆく。「常磐姫(ときはのうば)」は<常処女(とこをとめ)>風の語構成だから、「九十九髪姥」や「八百比丘尼」と謳う概念規制にかよう。「つくも」(江浦草)は「ふとる」(太藺)で、白髪との聯想から「百」の字より一画欠いた「白」にあてて<白髪>の比喩をささい、同時に「百年に一年足(ももとせ ひととせ)らぬ九十九髪…」(天福本「伊勢物語」63段)ともいうような修辭法をつくる(「傍廂」・「傍廂斜纏」・「比古婆」(衣)・「松屋筆記」・「海録」20.)。「ふとる」(太藺)はべつに「おほる」(大藺)。「おほるぐさ」(大藺草)ともよぶかやつりぐさ科の多年生草、それで<老>にかさねてうけとつてもいた。「八百比丘尼」の<八百(やほ→はっぴやく)>にしても、神聖数・絶体多数をいう全称名辞だった。八百万・八百日・八百路・八百稻・八百屋 → 八百羅漢・八百八町・八百八後家、といった名詞複合する。とにかく九十九髪姥とか常磐姫や八百比丘尼は、ひとしく寿福にめぐまれた老女をさす。<常磐姫>は白拍子の常盤の前 → 常盤御前たち復員統一した後代形象のほかのものではない。そこには王朝から室町への変遷転位が裏うちされている。だから義経説話の判官物・法談物の<常磐>、とくに幸若舞曲の「鞍馬常磐」(「常磐問答」)・「伏見常盤」(伏見落)・「山中常磐」にたどられる吟遊派の芸術路線が、あざやかに「常磐姫物語」に際だつ。

一 大和の国に常磐姫といふ人はべりける。楽しみ榮えてすごしけるが、年ごろ翁におくれてのち、子どもあまたありけれども、よろづこころにしたがふことぞなき…老のすゑこそ悲しけれ。柴のあみ戸のあけくれに、つもれる罪をも知らずして、むなしく年月すぎゆかば、われ後世をいかがせむ。

朝には世路にほこれども、夕にはわれとなく白骨にいたる身を知らずして、赤白ふたつの腸のわだかまれるをたとふれば、毒蛇にかはらぬ風情かな。紅粉翠黛に頭をいろどりて、男女和合の愛欲は、くさきかばねをいだけり。死骨を焼きぬれば、白骨となりて野にしやれぬ。

皮肉のあひだに乱散して、刹那のほどに離散する。…

(「常磐姫物語」)

「朝には世路に…」の条は、「和漢朗詠集」巻下<無常>の七言詩一聯の「朝有紅顔誇世路暮為白骨朽郊原」による。これは冷泉院のきさき麗景殿女御の中陰の願文から。「白骨となりて野にしやれぬ」とともに、恵心流の白骨観にもとづいている。「しやれ」は「しやる」の連用形で「しやる」が<さる>の訛語、<さる>(下二段活)は<される>(下一段活)の文語である。だがもと<さる(曝)>は四段活だったので、曝板・曝貝・曝木・曝首とも接頭語化してゆく。以空の「玉かがみ」にも「…白骨は草むらによこたゆれども、これを抱くものさらになし…」という。「文華秀麗集」<哀傷>に嵯峨天皇の御製として、「悽然幽客隙 鎖骨魔風霜…」(日本古典文学大系本)と詠ずる。すでにプロトタイプなら凝縮した詞彩をもちいて、空海の「三教指帰」で豊麗にうたいあげてある。

一…傾城の華の眼は、忽爾として緑苔の浮べる沢となり、珠をたれたる麗耳は、倏然として松風の通へる谷となる。朱をほどこせる紅の頬も、つひに青蠅の踏蹴となり、丹に染めたる赤き唇も、化して烏鳥の嘯唳となる。百の媚の巧みなる笑も枯れ曝せる骨の中にあふべきことかたく、千の嬌の妙なる姿態も、腐ち爛れたる体のうちには、誰かまた敢て進まむ。峨々たる漆き髪は、縦横としておどろの上の流芥となり、織々たるしろき手は、沈淪して草中の腐敗となる。…涓々たる臭液は、九竅よりわきあがり、

(「三教指帰」)

一 悪業かたちをあらはして、まさしく剣に身をさきて、刀の林にかばねを截る。紅蓮大紅蓮の水にとざされて、焦熱大焦熱の焰にむせばむことのかなしきよ。

うき身のほどを観ずれば、岸のひたひの根をはなれたる草ほどもなき。命をものにとふれば、江のほとりなる捨て小舟。かかる無常をおもふには、若くさかりの身なりとも、いとひはつべきあだし世を、ましてうばらが老の身の、かしらには雪をいただき、…息はあらくて齒は落ちぬ。…かひなきいのちながらへて、子どもにみゆるもはづかしや。念仏申して死なばやと、姫にはかきに思ひたち、願ふ衆生を迎へとらむと、誓ひをたてておはするか。…

(「常磐姫物語」)

一…獄卒地獄の人をとりて刀葉林におきて、かの樹の頭にただしくかざれる婦女あるを見しむ。かくのごとく見をはりて、すなはちかの樹に上らむとす。樹の葉やいばのごとくにして、その身肉をさきつぎにその筋をさく。かくのごとく一切のところをさきをはりて、樹に上ることをえて、すでにかの婦女をみれば、また地にありて欲に媚びたる眼をもって罪人を看あげて、かくのごとき言をなさく、「汝をおもふ因縁をもってわれこのところにいたる。汝いま何ゆゑぞわれに寄り近づかざる。何ぞわれをいだかざる」と。罪人見をはれば欲心熾盛にして、次第にまた下らむとすれば、刀葉上に向かひて利きことかみそりのごとし。前のごとく遍く一切の身分をさき、すでに地にいたりをはれば、かの婦女また樹の頭にあり。罪人見はってまた樹に上る。かくのごとく無量百千億歳、自心にたぶらかされて、かの地獄の中にかくのごとくころがりゆき、かくのごとく焼かるるは、邪欲を因とすればなり。(「往生要集」)

「常磐姫物語」の「…剣に身をさきて、刀の林にかばねをきる…」という心象風景は、剣林地獄→剣樹地獄→刀葉林地獄でのことで、これは十六地獄のうちにくまれている。熱鉄丸の果実をもつ剣樹の林のなかで、罪人どもは全身傷壊の苦患をうける。不孝・不敬・無慈悲のやからが陥ちてゆくところ。「紅蓮大紅蓮」は氷の八寒地獄のふたつだが、原語で分類してあぶだ・にちぶだ・あせちだ・かかば・ここば・うはら・ほどま・まかほどまのうちのはどま・まかほどまに

あたる。「焦熱大焦熱」が八熱地獄→八大地獄→八大奈落の層次のうちにあつて、それは等活・黒繩・衆合・叫喚・大叫喚・焦熱・大焦熱・無間とつづく。けれども地獄とよぶそのものは、さらに<九界>（菩薩・縁覚・声聞・天上・人間・修羅・餓鬼・畜生・地獄）の一部門でしかない、とみてゆく宇宙論ユースモロジーによつてゐる。「一遍上人語録」卷上<百利口語>には、

一 六道輪廻リウワウのあひだには ともなふ人もなかりけり
 ひとりむまれてひとり死す 生死の道こそかなしけれ
 あるは有頂の雲の上 あるは無間の獄の下…
 …つねに三途の悪道を 栖すまとしてのみいでやらず
 黒繩・衆合の骨をやき 刀山・劍樹に肝をさく
 餓鬼となりては食にうゑ 畜生きよ・愚癡のむくいもうし…

「うき身のほどを観ずれば…」は小野小町の<わびぬれば身をうき草の根をたえてさそふ水あらば去なむとぞおもふ>（「古今集」卷十八の 938・「新撰和歌」卷四・「古今六帖」卷）に沿つた発想法である。と同時に直截には「和漢朗詠集」卷下<無常>の辭句をふまえている。「身を観ずれば岸のひたひに根を離れたる草 命を論ずれば江のほとりに繋がざる舟」、この七言詩一册「親身岸額離根草 論命江頭不繋舟」の訓法の根拠は、「和泉式部集」に証跡をたもち、べつに「三宝絵詞」序（東寺本）にもみられるし、謡曲「大原御幸」（喜多流「小原御幸」）へひかれてもゆく。同じく謡曲でも「碇潜いかりかづき」には、「身を観ずるときは岸上の草 命を知れば江のほとりに繋がざる船」と意識してある。かねて社会通念だつたようで、「一遍上人語録」卷上<別願和讃>のはじめのところ、「身を観ずれば水の泡 消えぬる後は人もなし、命おもへば月の影 いで入る息にぞとどまらぬ…」へ Variation をみせている（←「維摩経」・「出曜経」十七・「大乘同」性経」上・「竜樹薩菩十二礼」・「止観」）。「常磐姫物語」のプロローグがとつてゐる立場はリアリズム、だがエピソードのとちめ態度はシュールリアリズムである。

一 小野小町にあらねども、みづから野べにやおくらまし。いやいやわかれし沙婆世界、これもおもひて何かせむ。阿弥陀仏の左右の弟子、観音勢至菩薩たち、姫をみちびきたまへ、なむあみだぶつと唱へつつ、高座にのぼり念誦して、西にむかひ伏しをがみ、やがて臨終正念して、紫雲たちまちたなびきて、音楽空にあらたなり。華降り異香薫じつつ、往生うたがひなかりけり。

後の世までも書きとどめける、常磐姫こそめでたけれめでたけれ。

すべて中世の往生譚の方則にしたがつてゐるからである。これは<起>と<結>との照応関係に、主題設定をもつのではない。いってみると<起>と<結>と所詮は、物語進行の額縁・箴めがくぶち枠にすぎない。というわけは<承>のところ<転>のはこびに、言語芸術としての可能経験・成立条件がかかっている。それを作劇法にうつして<序>→<破>→<急>とも称している。「一遍上人語録」卷上<別願和讃>からの抄、

一…仏も衆生もひとつにて 南無阿弥陀仏とぞ申すべき
 はやく万事をなげ捨てて 一心に弥陀をたのみつつ
 南無阿弥陀仏と息たゆる これぞおもひの限りなる
 このとき極楽世界より 弥陀・観音・大勢至
 無数恒沙の大聖衆 行者の前に顕現し
 一時に御手を授けつつ 来迎いんぎふ引接たれたまふ

ふたたび「一遍語録」巻上<消息法語>の一章より、

- 一 他力称名は不思議の一行なり。弥陀超世の本願は凡夫出離の直道なり。諸仏深智のおよぶところにあらず。いはんや三乘浅智いちまやうの心をもてうかがはんや。ただ諸教の得道じんちを耳にとどめず、本願の名号を口となへて、称名のほかにわが心をもちひざるを、無疑無慮乗彼願力定得往生といふ。南無阿弥陀仏となへて、わが心のなくなるを、臨終正念といふ。このとき仏の来迎にあづかりて、極楽に往生するを、念仏往生といふなり。南無阿弥陀仏。
- 一 それ死本源の形は男女和合の一念、流浪三界の相は愛染妄境の迷情なり。男女かたちやぶれ、妄境をのづから滅しなば、生死本無にして、迷情ここに尽きぬべし。華を愛し月を詠ずる、ややもすれば輪廻の業。仏をおもひ経をおもふ、ともすれば地獄の焰。ただ一心の本源は自然に無念なり。無念の作用は真に法界を縁ず。一心三千に遍ずれども、もとよりこのかた不動なり。しかりといへども、自然の道理をうしなひて意業の懇志いげうをぬきんで、虚無の生死にまよひて幻化げんげの菩提をもとむ。かくのごとき凡卑のやからは、厭離穢土欣求浄土のころざしを深くして、息たえ命終らんを喜び、聖衆の来迎を期して弥陀の名号をとらへ、臨終命断のきざみ無生法忍にかなふべきなり。南無阿弥陀仏。

さきの「…白骨となりて野にしやれぬ。皮肉のあひだに乱散して、刹那のほどに離散する…」といった表現なら、伝蘇東坡作「九相（想）詩」にうたうもの一新死相・肪脹相・血塗相・蓬乱相・噉食相・青瘀相・白骨連相・骨散相・古噴相一と基層は共通項にある。人間に対する五停心観のひとつ不浄観について九想をたくむ。九想とは屍相の変化九種をとらえてきて、迷妄出離へのアプローチとするもの。それには青瘀・膿爛・虫噉・肪脹・血塗・壞爛・敗壞・焼・骨をかぞえ、こういう九相にたよって<九想>をみちびきだす。敦煌本九想観詩とか空海の「性雲集」の九相詩にいちじるしい。鈴木正三は「万民徳用」<四民>武士日用の条で、「物に勝って浮ぶ心の類、勇猛たぐひの心を体とする」項目に、<この身の不浄を観ずる心>をとりあげ、出離の願力へ包摂してゆく。また九想は脹想・青瘀想・壞想・血塗想・膿爛想・噉想・散想・骨想・焼想をいう（「正法念処経」四五<観天品>→「大智度論」）。「好色一代女」巻六の<皆思謂おもはくの五百羅漢>で、「…名は留ってかたちなし。骨は灰となる草沢のほとり…」としたためていることも、「九相詩」の古噴相の「五蘊自元可皆空 縁底平生愛此躬 …名留無貌松丘下 骨化為灰草沢中…」をなぞっている。主客一切を蘊・処・界にわけてみている。<蘊>は色・受・想・行・識の五蘊とし、<処>を六根（眼・耳・鼻・舌・身・意）と六境（色・声・香・味・触・法）とあわせて十二にわかち、それから<界>が六根六境へ六識（眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識）を加えて十八界に細分してある。三世輪廻の因果関係を十二のすがた一無明・行・識・名色・六処・触・受・愛・取・有・生・老死一にあらわして「十二因縁絵巻」（根津美術館蔵）がある。「常盤姫物語」が綾なす「…紅粉翠黛にかうべをいろどりて、男女和合の愛欲は、臭きかばねをいだけり…」は、やはり「好色一代女」巻五<小歌の伝受女>の章の「…男女の淫楽は、互に臭骸をいだけく…」ともかよい、ひとしくどちらも伝蘇東坡の「…紅粉翠黛唯綵白皮 男女淫楽互抱臭骸…」をふまえている。ことごとく色道穢悔物をつらぬく、発想法の定型律をかたどるものである。

- 一 東坡が詞に、男女の淫楽愛執の道は、たがひのくさきかばねをいだきて、これを愛しこれを楽しむ。…その身たちまぢによはひかたぶきぬれば、翠黛紅顔もおとろへ、翡翠の簪は荆蕨となり、ひたひに波をたたみ、丹花のくちびるもくろく、腰には梓の弓をはり、すさまじくなりゆきて、もとみし人のすがたともみえず。…

やうやく命つき魂さるときは、わりなくちぎりふかく枕をならべし夫婦、…しばしもとどめず、これを野原にすててむなしくかへる。雨にそそぎ日に曝れ、肉はくさりて草の根をこやし、腸はただれて蒼蠅のかてとなり、くさき香のみぞのこりける。たれかこれを見て、むかしの恋慕を思はむや。焼けば灰となり、白骨ばかりのこりて、蓬がもとのちりとなりぬ。たれかむかしの貌を思ひて、この白骨を愛せむや。うづめばまた土ふるき塚となりて、秋の草のみ生ひ茂り、たれかむかしのよしみを思ひて、このふるづかにやどらむや。

(徳川文芸類聚本寛文二年版「為愚痴物」
「語」卷二の十<東坡娼楽をそしる事>)

一 東坡唐人の詩序に、紅粉翠黛唯綵白皮 男女娼楽互抱臭骸と嘔りおきて、きたなきものの最上とす。
(「諸国心中女」
卷三の四)

<蘇東坡>に梵語 stupa「率塔婆」「卒塔婆」「卒都(堵)婆」の語感覚をうけとめていたかたむきがある。してみると「九相詩」から「玉造小町壯衰書」(「玉造小町」
將衰書)をへて、能楽小町物の「卒都婆小町」におよぶ秩序の理解がふかまる。率都婆は普通には方墳・円塚・靈廟と訳す。古代社会の玉造部の「玉」は<靈>の象徴で、玉床といえは靈床→靈殿をさし、葬送にさきだつて遺骸をおさめておくところ、ついに靈屋→靈廟へいたるわけになる。ほかに墓の上につくりかざす小舎風にもなつて、これを上屋(うはや)とよんでいる。ここまでくると卒塔婆の形態にちかづくであろう。だから卒塔婆→塔婆とは普通に墓、「辻卒塔婆」が墓地とか無常所を意味する。高野山の金剛峰寺の<町石卒塔婆>に典型をみるであろう。そこで以空の「玉かがみ」に説くように、「…亡魂とむらひのために…率塔婆に書して墓どころに立てぬれば、上は非想天・下は無間奈落のくるしみを救ひ、たちまちにその溶銅変じて八功德水の池となる」。つづいて率塔婆は大日如來の三摩耶形と規定づけてゆく。

一 山城国愛宕郡六道といふところにいたりける。…そもそもこの六道といふは、鳥部野の無常所にして、もろもろの亡者のために開くをもつて六道といふ。…小野 篁地獄に往来せしといふもこのところとなむ。
…無常遷流して送らざる日もなければ、末の露もとのしづく、おくれさきだつ煙つねに絶ゆることなし。

名留無貌松丘下 骨化為灰草沢中

とつらねたるも、かかるところをや…。

(読本「本朝醉苦」
提全伝」卷一)

「六道の辻」は六道へおもむくみちすじのことだが、具体的にいって鳥辺山の火葬場へいたる辻をいうのである(「嘉良喜隨」
筆」卷四)。<辻>はつし・つしご・つじ・づし・じすといっているところ、道が十字にまじわるちまたをよぶほかに、高所・頂点・天井・窮極をさす方言があるわけは、はじめ天上と地表や地表と地下などつなぎむすぶ枢要のポイントをいったからである。六道→六趣とは地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上、衆生はだれでも善悪の業因にみちびかれてゆく必至の迷界ときく(「諸経要集」七・「宝物集」
・「謡曲東岸居士謡鈔」)。鈴木正三の「反故集」に<六道之解並出法>をかたる。野狂小野 篁の冥府往来綺譚なら「江談抄」三や「今昔物語」二〇にみられ、これに関して伴蒿溪が「閑田耕筆」二で神沢貞幹は「翁草」一九四で論じている。「…名留無貌松丘下 骨化為灰草沢中…」は、「文華秀麗集」卷中<哀傷>には「…影歇青松下 声留白骨前…」と異葩を託する。とにかくこういう経緯すべてかみくだき消化しつくしてえがく文章は、山東京伝の読本「桜姫全伝曙草紙」卷四「二人比丘尼発心の記」であろう。

欲界の天人でさえも臨終におよぶとき、「五衰」といって避けられない変相工程をしめすとか、仮りに鈴木正三の「反故集」をひもとくなら、「十戒によって天上に生ずといへども、その果はつるときんば、またたちまち大地獄に墮して、無量の苦しみを受くるなり。…上天の極果に、八万劫の楽しみありといへども、つひに尽きはつる期あり、…このときにいたっては人間の八苦よりも、天上の五衰は堪へがたしといへるはこれなり」という。ひときわ「本朝文粹」巻十四<願文>下の追善部に、このイデオロギーのパタンをさぐることができる。「和漢朗詠集」巻下<無常>に明徴をもとめるなら、

一 生者必滅 釈尊未免栴檀之煙 樂尽哀來 天人猶逢五衰之日

「往生要集」上巻<天道>第六では、切利天の人の命終のときに、五衰の相を現ずとして順序をします。一は頭上の華鬘たちまちに萎え、二は天衣に塵とか垢がめだち、三は腋の下から汗がながれはじめ、四は両眼しきりにまたたきし、五は住居をしまなくなる（「往生要集乙酉記」・「往生要集義記」・「往生要集講録」・「往生要集詮要」・「往生要集唯陀記」…）。

一 きふはさかゆとみしかども けふはかなしびきたるめり

にんげんおもへばあぢきなし 天にも五するぞまのがれぬ（「唯心房集」<今様><「六波羅密経」・「新婆娑論」）

一 釈提桓因、命將欲終、有五衰現。一者衣裳垢膩、二者頭上花萎、三者身体臭穢、四者腋下汗出、五者不樂本座。（「涅槃経」十九）

そのほか「仏本行集経」五や「俱舍論」十でも説いてある。だが<五衰>には大小の二種があつて、大のケースは衣服垢穢・頭上華穢・身体臭穢・腋下汗流・不樂本座で、この位相がみえはじめれば必死という。小の場合では樂声不起・身光忽滅・浴水著身・著境不捨・眼目数瞬だが、これは勝善根にあえば転ずることもあるとか。日本の檀林皇后伝として「本朝神社考」<梅宮>の条、

一 嵯峨天皇の後、橘氏、仁明帝を生む。後の諱は嘉智子、…

世にいふ、皇后、密法を空海に問ふ。海これを称揚す。…皇后、檀林寺を立て、空をすゑて、ときどき法を問ふ。ゆゑに檀林皇后と号す。…

后、容貌はなほは麗し。崩ずるにおよびて、「葬儀を用ひず、もつて中野に棄てよ。色欲に耽るもの、わが爛熳をみれば、すこしく驚悟することあらん。」つひに遺詔にしたがひ、その屍を西の郊にすてたてまつる。そののちその拳をひろひ、もつてをさめ埋む。よつてところを…拳の宮といふ。

檀林皇后についてつぶさに「日本後紀」・「文徳実録」・「歴朝坤徳録」にのべられ、ちかく「鶯宿雑記」巻三にしたためる。檀林の字それに十八檀林をめぐつて「孝経楼漫筆」で陳べている。「九相詩」にしても原典をたぐるとき、天台宗の摩訶止観へさかのぼる（大日本仏教全書本「止観口伝略頌」・恵心僧都全集本「止観坐禅記」・智証大師全集本「止観」）。止観のエピソードは「発心集」巻三・「私聚百因縁集」巻八や「古事談」巻二・「十訓抄」三とか十にかたられ、根本中堂を止観院と認っているほどである。

一 世上の源氏読み、止観といふことは夢にも知らざるなり。およそこの物語は、天台六十巻をかたどり、五十四帖あれども六十帖といふ。日吉山三千坊をあらはして、二千六百丁にたらざれども三千枚といへり。それは何ゆゑといふに、天台大師の法華経一部講じたまふを、御弟子の章安大師、末代のためにかきしるしたまふに、まづ「妙法蓮華経」の五字を玄義十

巻とし、如是我聞より作礼而去までの、文々句々をしるしたまふを文句十巻とし、その玄義と文句とに、一念三千・一心三觀のさとりを、しるしたまふを止觀十巻となす。己上これを天台の三千巻といへり。しかれどもその御弟子妙楽大師、また十巻に十巻づつの註をあらはしたまふ。あはせてこれを天台六十巻といへり。この物語にも、註の外に深き觀念あるを、止觀の説と申すなり。
(統群書類従本・日本古典文学大系本「戴恩記」)

という源氏物語解釈を花の本宗匠松永貞徳は、二条家歌学の継承者としてとっているわけである。止觀のうち五停心觀のひとつに不淨觀がある。

一 不淨觀と申すは、我も人もこの身は、始めより終りまでの内外不淨なり。たとへば…西施南威がひとたび笑める。…さるとも野のあひだ塚のほりにすてしかば、そのすがたみな替へにき。白き色青く、赤きくちびるは黒くそらして、虫うめきたがり、腐脹爛漫してくさき香遠く匂ひ、犬は手をくはへて東西にはしり、鳥は眼をくじりて南北にとぶ。つひに蓬生がもとにくちて、ただのこる骨のみあり。誰心あらむ人かこれを受して、手を取り口を吸ひいだき、床をひとつにせむや。この觀をなすとき、よく生死の罪障を滅するなり。これを不淨觀とは申すなり。たとひ悪業をなすといへども、かへり善となるは、この觀によるなり。煩惱即菩提・生死即涅槃と、婬欲即是道・患癡亦如是と説く。
(統群書類従本「康頼宝物集」)

一…不淨を觀じてその執をひるがへすなるべし。おほかた人の身は骨肉のあやつり朽ちたる家のごとし。六腑五臓のありさま毒蛇のわだかまるにとどまらず。…わづかにうすき皮一重掩へるゆゑに、このもろもろの不淨をかくせり。おしろいを施し薰き物をうつせど、誰かはいつはるかざりと知らざる。海にもとめ山にえたる味も、一夜へぬればことごとく不淨となりぬ。いはばぬがける瓶に糞穢をいれ、くさりたる屍に錦をまとへるがごとし。…いはむや魂さり寿つきぬるのちは、むなしく塚のほりに捨てつべし。身ふくれ腐りみだれてつひに白き屍となり、眞の相を知るゆゑに念々にこれをいとふ。愚なるものは仮の色にふけりて心をまどはずこと、たとへば厠の中の虫の糞穢を受するがごとしといへり。…
(「発心集」卷四)

一 陸奥有一女、人立艶好色、定夫無之、衆人共來…皆以許容、…有親人間由緒、答曰、「我聞人情是菩薩、依之不返男來、又聞愛欲是流轉之業、依之交会之時、…彈指合眼觀不淨、…仍衆人皆不來也。…
(「拾遺往生伝」)

「一遍上人語録」<時衆制誡>には、「専ら不淨の源を觀じて愛執の心を發すことなかれ」という。菩薩行としての不淨觀の作法なら、「閑居の友」にもかきとめるとおりである。くだって元録十一年刊行「小夜嵐」卷三<仏を悪む下女の事>からの抄、これはかなり「康頼宝物集」をもっているものだが、

一 人界に「生」をうるものは、男女によらず貴賤にかぎらず、わが身をよくよく分別思惟して、つたなき身のほどを觀ずべし。そのところは人間にそなはりたる不淨相・苦の相・無常相の三種あり。…

不淨相はさしあたり目にみえねば、觀念の眼ならでは思惟しがたし。…男女の執着をなすは、尿穢の画瓶をいたくがごとし、といふところを歌に、

あるほどの不淨をつつむ皮ぶくろいろへにまよふ人ごころかな

…唐の蘇東坡居士がつくりし九相の詩は、七日の悪相にかはるところを九相につくる。あるひとのうたに、

なきがらを人は送りてかへる野のあとなほしたふ大からすかな

一 骸骨のうへを粧て花見かな

(「鬼貫句選」)

それにしても愛欲の極限を設定することができるであろうか、この無量劫苦のゆくえを追究してみよう、とした近代の典型には幸田露伴の「対彌腰」とか谷崎潤一郎の「少将滋幹の母」とかがある、ときに「少将滋幹の母」の原拠なら「世継物語」だった。「常磐姫物語」の「…悪業かたちをあらはして、まさしく剣に身をさきて、刀の林にかばねを截る」というくだりは、恵心僧都源信の「往生要集」<地獄篇>にえがく浄行者の形相から、これをまた現代にうつしこころみたのが、亀井勝一郎の「亡霊の対話」や「愛の無常について」である。

一 人あまりに心あしかるべからず、人のものをもほしがり、わがものをばをしがり、人ををこのものにして、かしこ顔に人の目をすきぬれば、慳貪罪のむくいによりて、かならず餓鬼のむくいを得べし。百菓林に結ぶ、とらんとすればすなはち刀林なり。満水海に入る、のまんとすれば猛火なりといへり、もろもろの飲食の名字をきかずして、無量劫を経ること悲しむにあまりあり、こころある人檀度のおこなひをなせり、されば止観にいはいく、「過去慳貪の業のゆゑ、今生の貧窮を生む」といへり。

(続群書類従本「五常内儀抄」)

「五常内儀抄」はべつに「現当教訓抄」といわれ、著作を少納言入道信西やら小松殿やらにあてて、可否はとにかくまず時衆派の思索に属する。

一 シテ・サン謡「一生はただ夢のこどし、誰か百年のよはひを期せん、地謡「万事はみな空し、いづれか常住の思ひをなさん、シテ謡「いのちは水上の泡、地謡「風にしたがって江めぐるがごとし、…地謡「天仙尚し死苦の身なり、いはんや下劣貧賤の報においてをや、などかその罪軽からん、死に苦しみをうけかさね、業に悲しみなほ添ふる、斬鎖地獄の苦しきは、臼中にて身をきること、截断して血狼藉たり、一日のそのうちに、万死万生たり、劍樹地獄の苦しきは、手に劍の樹をとづれば、百節零落す、足は刀山ふむときは、劍樹ともに解すとかや、石割地獄の苦しきは、両崖の大石、もろもろの罪人を砕く、つぎの火盆地獄は、かうべに火焰をいだけば、百節の骨頭より炎々たる火をい出す、あるときは焦熱大焦熱の焰にむせび、あるときは紅蓮大紅蓮の水にとぢられ、鉄杖かうべをくだき、火燥あなうらをやく、シテ謡「飢ゑては鉄丸をのみ、地謡「渴しては銅汁をのむとかや、地獄の苦しきは無量なり、餓鬼の苦しみも無辺なり、畜生修羅の悲しみも、われらにいかでまさるべき、身よりいませる科なれば、こころの鬼の身を責めて、かやうに苦をば受くるなり、…

(校註日本文学大系本謡曲「歌占」)

地獄の絵に、劍の枝に人のつらぬかれたるをみてよめる

和泉式部

一 あさましや劍の枝の撓むまでこは何のみのなれるなるむ、

(「金葉集」卷十の 688)

人間を位置づけて<欲>ことに「愛欲」の Chaos として凝視し、そこに貪婪あくことがないため、どのような方策をもちいるとしても、決して自己充足とはならない、久遠妄執の悪魔主義の深淵を知るばかりである、そこで「常磐姫物語」の原文をうかがうと、

一 西に向ってふしをがみ、「南無や西方弥陀如来、姫を極楽へ具してゆき、よからむ縁をだづねつつ、ありつけ候へ弥陀仏、夜とともに念仏すれば、のどかはきてかなしやな、あら湯ほしや弥陀仏、湯でも水でもすこしたべ、これにつけてもいそぎつつ、「浄土へ疾して参らばや、あみだよあみだよ」とよばはれど、惣じて仏のおはせぬか、仏の耳の聞えぬか、うばらが声のおよばぬか、人ためならぬ姫を措き、他人をばし迎へたまふなよ、世の人往生すると聞くなれば、うばにはながくうとまれて、しらせたまふな弥陀仏、…

子どもはこれを聴くからに、あはれなるとはいはずして、憎みけるこそをかしけれ。「うばが念仏申す聞け、極楽浄土に閑あらし。高ごゑせずと骨折らずに、こころのうちに申せかし。あなかしましや、年寄の夜な夜なごとの高ごゑや」とて、申せとすすむる子はなくて、制することこそ悲しけれ。おのれらあまた育てては、老のゆくすゑかからむと、たのしびしことは飛鳥川、明日をも知らぬこの姫を、あはれとおもはぬはかなさよ。…「父母恩重経」のことわりを、あはれ子どもに聞かせばや。…

老いては若ものにないがしろにされてくるといふモチーフは、世界大にひろがる棄老譚の構図に通じている。そういう連環のものとして姥捨山伝説がつづく（「大和物語」・「枕草子」・「俊秘抄」落葉・「信」）。この系譜は宝暦三年版黒本「姥捨山物語」三巻をへて、昭和の小説「檜山節考」までつながってゆく。ところで<姥捨山>とは「小泊瀬山」（をはつせやま）の音韻変化にちがいない。小泊瀬山なら「小泊瀬山の石城…」（「万葉集」卷「^{いほき}十六の3806」）とうたい。「隠国」（こもりく）をもつて枕詞にしてゆく（「万葉集」卷一の45・卷十一の2511・卷十三の3311…）。そういうアプローチの実証が可能であることは、たとえば大和の初瀬によってもあきらかであろう。いまでは山の名には泊瀬、それから土地のときには初瀬、寺として長谷とつかいわけているが、もとより死体葬送のための天然のふところをさしていた。歿してからの他界霊域であることの由緒は、「長谷寺縁起」にもとづいてもうたがいをさしはさむ余地がない（「元享釈書」卷二十八・「北辺隨筆」卷二・「橘窓自語」・「遠碧軒記」）。何かにより <長谷>の表記法でさえ、<はぶる>（葬る一四段活一）地形を印象化している（「安齋隨筆」）。<長谷>は「果つ狭」であつて<せ>とは終局結着のところ、空間的に場所を時間的には場合をいう古語である。また<はつ>が下二段活用動詞として、おわる→きわまる→つきてしまつてきえうせる→ぎりぎりまでゆきついてしまふ、だから死ぬのを意味することになる。のちにいたると<はつせ>の「つ」を、体言について場所がらをしめす格助詞とみて、省略して<はせ>とよびなれてきた。と同時に長谷寺はもと土師寺だったし、<はにし>から<はっせ>へ<はじ>より<はせ>にうつりかわりもした。「はにしべ」「土師部」がちじまって「はじべ」へ、はにはあかつち・ねばつち・へなである。はにしべ→はじべは葬送従事から幽界管理をふくめてつかさどつた。垂仁紀には野見宿弥にことよせて、埴輪の制の発生をかたりつぐ土師部曲伝承をとどめ（「塩尻」七七）、「播磨国風土記」揖保郡の一件に、土師見宿弥の墓山をめぐる伝説をのこす。弩（野）見宿弥は菅原氏・大江氏の祖ときく（「江談抄」卷三・「如蘭社話」三三）。大阪府南河内郡美陵町の道明寺は文楽浄瑠璃「菅原伝授手習鑑」のゆかり、この道明寺が以前には土師寺と称していた（「語曲」道明寺）。道明寺は真言尼寺だから菅丞相の<伯母（姥）> 覚寿をもちだすわけだが、名詮自性ことさら「覚寿」に唱導派の言語芸術の所縁をみとめることができる（「河内鑑名所記」卷四・「本朝丸鑑」卷一・「国花万葉記」志貴郡の条）。「常磐姫物語」の姫がおこなう子どもへの呪咀は、青春喪失を悲しみなげく弱者錯綜や断層感の意識複合から、これは若やぎ花やぐものへの連鎖反応というより、ひたぶるに老醜を直視しての自己嘔吐であろう。ついには衰残退散にいらだちのしりわめきちらす。やがて死去にいたるまでをふくめて、彼岸に対して此岸だし天上と比べて地表のできごと、とながめてくるところに<うき世>（憂世→浮世）観の展開がきざす（「柳亭記」上・「玉勝間」四・「卯花園漫録」三・「一話一言」一・「にぎはひ草」下）。

- 一 なにせうぞ くすんで一期は夢よ ただ狂へ。 （「閑吟集」）
- 一 夢の浮世の露の命の わざくれ、身はなり次第よの、身はなり次第よの。 （「閑吟集」）

「常磐姫物語」の発生基層

一 「夢の浮世をぬめろやれ、遊びや狂へ。みなひと」と、と世にありがほほうらやまし、…

(「うらみのすけ」)

一 浮世は夢なれば、さのみくすんでも、瓢箪から駒もいでじ。

(「歌舞伎草紙絵巻」)

一 夢の浮世にただ狂へ、とどろとどろとなるいかづちも、我と君との中をばさけじ。

(「慶長見聞集」巻五・「阿国歌舞妓草紙」・「うらみのすけ」)

一…まして世の中の事ひとつも、わが氣にかなふことなし。さればこそ憂世なれといへば、いやその義理ではない。世はすめばなにはにつけて、よしあしを見きく事みなおもしろく、…歌をうたひ酒のみ、浮きに浮いてなぐさみ、手まへのすりきるも苦にならず、しづみいらぬころだての、水にながる瓢箪のごとくなる、これを浮世と名づくるなり。…(「浅井了意著」浮世物語)だがときとしてひるがえって主知にめざめれば、なるほどすでに「徒然草」九十三段に解き明かすとおりであろう。

一 人、「死」を憎まば、「生」を愛すべし。存命のよろこび、日々を楽しまざらむや。おろかなる人、この喜びをわすれて、いたつかはしく外の喜びをもとめ、この財をわすれて、あやふく他の財をむさぼるには、ころごしみつことなし。生けるあひだ「生」を楽しまずして、死に臨みて死を恐れれば、この理あるべからず。人、みな「生」を楽しまざるは、死を恐れざるゆゑなり。死を恐れざるにはあらず、死の近きことを忘るるなり。もしまた、生^{しやう}死^じの相にあづからずといはば、実^{まこと}の理を得たりといふべし。

よってくるところヒューマニズムの体認に発して、しだいに Hedonism へ Epicureanism へおもむくことは必然であろう。けれどもそれもこれもとどのつまり、青春のメカニズムの限界でしか意味がない。まず現実を全然的にうけとる機能価値をうしなしたときには、死滅そのものともちがうところがないであろう。だから<うき世>の包摂概念には、「好色」とよぶ部門がふくまれていた(寛永版「花花草草」・延宝刊)。それで「浮世草子」(「男色比翼鳥」・「色里迦陵頻」)→「浮世本」(「茶契偏」)が、「色草子」(「好色文伝授」・「傾城武」)→「好色本」(「西鶴冥途物語」・「諸芸大平記」・「飛鳥川当世男」)ともいわれてきたのである(「骨董集」・「柳亭記」)。<わけの聖>二万翁西鶴の「好色一代男」ブームをきっかけにして、ひとしきり題簽に「好色…」をかかげられて行ったのだが、とかくジャーナリズムにひかれながら概念規制は、「当世」・「浮世」・「風流」・「寛濶」・「傾城」・「栄花」など新傾向を銜^{てら}ってくる(「好色破邪頭正」・「海録」・「塩尻」・「好色本目録」)。<色好み>(「古今集」・「仮名序」)はただちに<好色>(「古今集」・「真名序」)と、方程式めかして併立しないのだけれど、浮世草子の「好色…」の標題が、「風流…」をかざすものと開板の時局を同じくするばかりか、どちらか入れ替ったり重なったりしている。事例をあげると元禄元年上梓の由之軒政房の「好色文伝授」五巻が、宝暦三年復刊して「風流文評判」にあらたまる。元禄十五年になって都の錦が「風流好色十二段」六巻をかく。つづいて「好色」は「栄花」を誘致する。貞享に鏤刻の「好色四季ばなし」四巻が、元禄六年にでるとき「浮世栄花一代男」となり、元禄十一年にいたって「好色堪忍記」へ正徳三年のころには「浮世花鳥風月」へ。また貞享版の「好色年八卦」四巻が元禄五年再摺の際に「傾城三島曆」に、これが明和三年におよぶと「傾城文反故」とみたびかわる。貞享三年の「好色五人女」五巻が氣質本にみたてられて「当世女容気」というし、元禄元年の「好色盛衰記」五巻を十四年にだすときには改題して「西鶴栄花咄」とよぶ。「好色一代男」の主人公の名は浮世之介→世之介だった。

一 おのづから無常にもとづく鐘のこゑ、大鼓念仏とて、その暁の雲晴れねども、西へ行く極楽浄土、ありがたくも殊勝さも、入拍子の撥撞木、… (「好色」代女)

「好色」の局面展開に形影ともなうものは<無常>だった。まして所詮は「…諸行無常是生滅法…」(「涅槃經」)という大前提にたち、「…一念とどまらざれば、諸法みなみだりにみゆ、夢のごとしかげろふのごとし、水の中の月のごとし鏡中のかたちのごとし…」(「維摩經」)、ともことさらに説いてあるではないか。「和漢朗詠集」<老人>の条にとどめて藤原為頼のうた、「いづこにか身をばよせまし世の中に老をいとはぬ人しなれば」、「宝物集」上には初句を「いづかたに」とかきとめて、この歌物語なら「撰集抄」第八<為頼歎老苦并高光歎務事>にみえている。「常磐姫物語」の内証方法にしたがうとき、

一…子どもあまたありけれども、とぶらふことはあらばこそ、何しに子ども育ておき、今はうらみのたねとなりけむ。うばらが若くさかりなりしとき、子どもが幼くありつるに、願ふことはなけれども、欲しさなるものをば、たづねもとめてくはせしに、うばらがかほど願ふには、あれども憎き、くればこそ。…姫をばよそになしはてて、人すまぬところどころにおしこめて、ひこらが憎むもわびしきに、疾して浄土に参らばや。…淵にも瀬にも身を投げて、死なばやと思へども、广大慈悲の釈迦だにも、八十一にて入滅したまふ。うばらが九十にあまるまで、生きてるもげに耻もなし。…子どもが憎むもことわりなり。かくは思へど酒ほしや。…盥の水にうつりたる、すがたをみればけふもまた、おそろしや鬼のひぼしにことならず。

柴の編戸に立ちかへり、思ひの涙を流せども、あはれと問へる人もなし。むかしは今にかへらねども、思ひいでてもかひぞなき。…阿弥陀もうばらを思へかし。

物語進行を極限状況にしぼって、ロゴスとバトスと水火まんじにたたかわす。いとなまれていた生活の日常は、肉体の否定条件のうえにたつ。これまでにつねに老化衰耗をめざして敗残落魄ときめつけ、歴史的にも社会的にも人間失格にあしらい他界追放をもって迫ってきた、そういうゆるしがたい違和事実にむかって、常磐の姫はデスペレートにいきどおりのろいうらむ。

一 うばらが若くありしとき、人をも恋ひつ恋ひられつ。またはこころづくしの人々は、業平・実方・光君、大内おほやけへも召されつつ、玉の床にもねしものを。長生殿の夜半にいで、比翼連理のちぎりまで、後世かけてかたらひし。そのいにしへも忘れず。…小野小町が衰へしに、かはらぬ姫がありさまに、百官万民ことごとく、仰がぬ人もなかりしに、玉楼金殿の床の上にしてかしづかれ、月卿雲客にうやまはれしも、ただ夢とのみぞおぼゆる。

…いまは子どもに憎まれて、破れむしろにふしたれば、あらいぶせや身もいたや。狐の皮かな二三枚、せめてわたちの皮もがな。たとへ鼠の皮なりと、得させたりせばよひごとに、背なかばかりにあててねむ…

だが実存証明をささえてくれるただひとつの随縁は、青春彷徨・恋愛遍歴の回想工程があるだけだった。生きていることの自己主張といっても、過去再現の演戯ばかりである。機能を喪失した衆苦充満の<生>は、実存主義との対決をうながされ、意識の非連続のあはいからもれてくるうめきは、一途ひたぶるに称名念仏でしかない。「常磐姫物語」のエピローグはもちろんフィクション、ことにつらぬきとおる思惟は他力聖門道である。まして他力聖門道そのものさえ、無比至上のフィクションといつていい。

一 念仏まうしさふらへども、踊躍歓喜のこころ、おろそかにさふらふこと、またいそぎ浄土

へまいるたきころのさふらはぬは、いかにとさふらふべきことにさふらふやらむ…

…煩惱具足の身をもて、すでにさとりをひろくといふこと、この糸もてのほかにはさふらふ。
 (「歎異抄」)

一 はねばはねよ をどらばをどれ はる駒の のりのみちをば する人ぞしる

ともはねよ かくてもをどれ ころごま みだのみりと きくぞうれしき (「一遍聖繪」第四)

常磐の姫の説話像は叙事点描の鮮度をすどくしているの、どれほど存在感をふかめていることか。到底さとりにきられるわけではないし、たすけだされてゆくよるべとともない、揺蕩のいのちのありようを浮き彫りにしてみせている。家の連累や血の系譜から断絶をはかり、彼岸浄土へ脱出転身をねがうとしても、それとてもせめてもの妄執の変装、とりあつめた煩惱の異形にちがいない。救われるということがらは、三諦→四諦のたぐいにまつのでなく、根源より慟哭をくりかえしながら、おもむろに自己浄化をとげつつたどるプログラムにある。とこしえの<信>に帰依してではない。たまゆらの<美>への陶醉にいざなわれつつである。だから臨終正念といってみたところで、華嚴座への移調のほかのものではない。

はじめ「うば」は老女一姥・姫一のことではなかった。生母に対して乳母をくをば> (小母) といった。ふるい一夫多妻婚制のころ神道倫理に映して、主神につかえる<やをとめ> (八処女) のなかで、<えひめ> (兄姫) につづく<おとひめ> (弟姫) が、<め> (妻) の<おと> (弟) →<めのと>にあたる。「倭名類聚抄」巻一に「妻妹女乃於止」といい「乳母女乃於止」とするすわけである。しだいに一語ながら多義をふくむようにはなったが、発生基層は神をやしないそだてる<をば> (未婚女性) →<うば> (神代理の保育者) 神信仰につながる。後代のどの山姥綺譚抄にしても、神の若子→神童の誕生の主導契機がからみついている。したがって現に「常磐姫物語」でも、はぐくみそだてた子どもの背反をはなしたす。別途のあかしを「好色一代女」巻六<夜発の付声>の章にもとめても、

一 一生のあひださまざまのたはぶれせしを、おもひだして観念の窓よりのぞけば、蓮の葉笠を着たるやうなる子どものおもかげ、腰よりしもは血に染みて、九十五六ほども立ちならび、こゑのあやぎれもなく、「おはりよおはりよ」と泣きぬ。これかや聞きつたへし孕女なるべし、と氣をとめてみしうちに、「むごいかかさま」とめいめいうらみ申すにぞ。さては血荒をせし親なし子かとかなし。「無事にそだてみれば、…めでたかるべきものを」と過ぎしことどもなつかし。しばらくあって消えて跡はなかりき。これを見るにもいよいよ世をかぎりと思ひしに、その夜あくれば、つれなや命の捨てがたくおもはれし…

いつてみるとこのところは、「産女の怪」を副意識にしてある。貞享三年京版「百物語評判」巻二の五が<産婦>でそれには、「…産のうへにてみまかりし女、その執念このものとなれり。そのかたち腰よりしたは血にそみて、そのこゑ「おはれうおはれう」と泣くと申しならはせり」とかきとめているあやかし→あやしのものをさす。<うば>を<うばめ> (姥女) →<うばめ> (乳母女) ともよんだが、<うば>へ後置修飾格<め>をつけてきたのである。すると<うばめ> (産婦) に観念聯合をもつ。これからやがて<うばめ>と称して「産座」(産褥)で死ぬ女がなる、という架空の化鳥の<姑獲鳥>とか、そういう産婦の幽霊とかをさすことばへ脈絡づけてゆく。「好色一代女」巻六がしている描写は産血に染まった産子である。うぶちをあらちというのはうぶとあらとは同義語だったから。うぶごはあかご→<みづご>であって、あかごの古語が「わかご」・「わくご」(若子→稚→別)である。赤子の霊をとりあっかい赤子塚伝説のトポロ

ジーにかよわせ、子安神の信仰系列へつながる伝承路線をあゆむ。能面がかたどる老女表象は、「姥」・「老女」・「捨垣女」・「小町」・「山姥」などにわかれている。ほぼこれに準じて老婆とよぶところの概念規制ができるにちがいない。作品技法として〈老〉を際だたすために、〈幼〉との対照をあざやかにしてある。みずから常盤の姫はうばらとっているけれど、室町期のころに京都の白河のあたりからでて、白木綿で頭面をつつみ腰には赤前だれをかけ、手に籠をもって師走のことほぎをして回った、女乞食の俗称を〈うばら〉ともいっていた。「三宝絵詞」下をひもとくなら〈うばら花比丘尼〉が、女人出家の功德を説いて遁世へさそうおもかげをうつす。西宮版黒本には「うばらが淵」二巻がある。

一 …母とみえしは六十路ばかり、常盤の姫がかたちしながら、念仏ざらひの面つきなり。…
(石川雅望著「狂文」あづまなまり」上)

〈うばら〉の位相はより一層にさかのぼってみるなら、神婚譚の玉依姫や水依姫であろう。「万葉集」の〈菟名負処女〉(うなひをとめ)から「大和物語」の〈菟原処女〉(うばらをとめ)への転換支点には、「産神」(うぶがみ→うぶのかみ→うぶすながみ)をまつる聖処女の慣行印象がはたらいっている。〈うばら花比丘尼〉にいたるともう巫女の本質から逸脱して、狂女→遊女→回国娼婦→歌比丘尼の部類にはいつてきている。「常磐姫物語」の書契化はこのうばらどもの言語芸術史をくぐっている。伝承者と作中人物とは一元化してうけとられてゆくのが、とりわけ唱導派の口誦文芸がたどる軌跡だった。というわけは伝承者が霊媒質となって、作中人物と二重構造でかたる立場と態度をとっていたから。そういう感情論理が近代の私小説の形成への回転軸をみちびきだす。「常磐姫物語」のスタイリングをとってみても、一人称と三人称とのあわいを縫う、発想法をかたちづくっている。その特徴は懺悔のケースとくに色懺悔物に際だつ。だから〈さんげ会伝〉から〈色祭文〉へ、〈どき物のメカニズム〉は変容するわけである。たとえば仮名草子の「七人比丘尼」(寛永十二年1635初版天和二年改題再摺して〈さんげ物語〉〈女さんげ物語〉)・「二人比丘尼」(慶安ごろ初版して寛文三年1663覆刻)・「四人比丘尼」(寛文元年1661刊行の〈小倉物語〉の重版改題本で宝永五年1705には一名〈花の情〉)より、江戸時代文芸資料本「たきつけ」・「もえくひ」・「けしすみ」三部作(延宝五年1667上梓)をへて、「好色一代女」(貞享三年1686)へまとまる秩序にいちじるしい。してみると色懺悔物のエネルギーは、ほどなく〈粹咄〉の性格趣向をつくりだす。

明治の尾崎紅葉の文壇デビュー作品「二人比丘尼色懺悔」(明治二十二年1889四月)それから「伽羅枕」(明治二十三年七月)までつづく。色懺悔をもって主題決定とする比丘尼物が、無常迅速から発心菩提をえがくことは定型律だとしても、とにかくそれはただ宗教小説であることの結論でしかない。まず懺悔にはナルチズムを伴う。色懺悔まして一人称発想法によるものほどめざましい。懺悔綺譚抄が轉身以前を回想して、かたりつづける縷々の章句は、いつでもどうして至純きわまるのであろう。夢幻のたていと憧憬のよこいとにいろどられて、眩耀放つ色道の華厳座を構築している。〈色〉とは近代のことばをかりていうなら〈青春〉である。色好み→好色とは青春の彷徨・漂泊・遍歴をさす。〈好む〉(四段活)は〈選る〉(四段活)とか〈好く〉(四段活)とかと同義語、それで〈えりこのむ〉や〈すぎこのむ〉と複合する。〈浮世狂ひ〉(「花花草草」・「久留流」)とも〈浮世遊び〉(「好色二」代男)ともいわれたよりどころである。色のそれこれごとく女若二道にふりわけ、その案内記・細見記・評判記を通じて、ととのえられてゆく恋愛美学が粹咄だった。老女物

→比丘尼物でもいたりつくところ粹咄に帰する。「七人比丘尼」の天和二年本は「(女)さんげ物語」とあらためるよすがも、とくべつに「四人比丘尼」が宝永五年本で「花の情」とよびなおすよるべでも、まるで同一座標の意匠だったのだから。

一…一樹のかげ一河のながれ、みなこれ他生の縁ぞかし。ましてやわが名を夕月の、浮世をめぐむひとふしも、狂言綺語の道すぐに讃仏乗の因ぞかし。(謡曲「山姥」←「信府統記」卷十七・「温故の葉」第一篇)

一 狂言綺語のたはぶれは、仏を讃むるたねとして、あらしきことばもいかなるも、第一義とかにぞ帰るなる。(「梁塵秘抄」卷一)

一 「ねがはくは今生世俗文字の業、狂言綺語のあやまりをもて、かへして当来世々の讃仏乗の因、転法輪の縁とせん」など誦じたまふも、たふとくおもしろし。(「栄花物語」うたがひの巻)

「無量寿経」に<妄言綺語>を十悪としてしりぞけ、慈雲の「十善法語」のダイジェスト版<人となる道>には、不妄語・不綺語に関してきびしく説いている。けれども諸法実相の妙諦よりいへば、転法輪讃仏乗の因縁でないものはない。

古代の部落には成年式にあたって、性技巧を実践指導する巫娼がいた。神妻(よりこ・よしまし)の二次順行であって、添臥そいぶしの慣習を定着させた。検垣の姫・九十九髪ひゃくちゅうじゅうはつの姫・常磐とこおとめの姫をもって象徴されている類縁のもの、そこでなるほど「倭名類聚抄」乞盗部では、巫女ひめみこと遊女あそびみことつきまぜている理由がわかる。けれども本質は<常処女>(とこをとめ)としてうけとられながら、曆日感覚からおうな(姫・姫)うば(姥)のすがたで物語化されていた。<ときは>(常盤)は<とこわか>(常若)によるものだし、「常若」は「変若」(をちかへり→よみがへり)に根ざす。

能楽の各流の所演・季不定の「山姥」は、百万(百魔)山姥とよぶ都の遊女(ツレ)と現実の山姥(シテ)とのモンタージュものぐるい構図をとる。舞姫の百万は信州の念仏道場へかようみちすがらという。「止観」・「法華玄義」・「般若心経」・「維摩経」のイデオロギーを猿楽→能楽化させた前衛叙事詩劇である。「奥の細道」の市振の宿でのエピソードにしても、ことさらに能楽「山姥」を背景にあしらった完全虚構、それは俳諧の<恋の座>を意識しての小説設定だった。遊女百万についてなら出版年次未詳だが、さきに仮名草子「百万物語」二巻がかかっている。喜多流の鬻物に「山姫」がある。天応大現国師沢庵は「山姥五十首和歌」(「沢庵和尚全集」第三卷・「高僧名著全集」第十一卷)をよみ、山姥を浄瑠璃化した主要作品が近松門左衛門の「こもちやまうば 山姥」(正徳二年1712)で、これを黄表紙へやつして「足柄山子持山姥」二巻(鳥居清経画・安永四年版)に、また青本で刊行年代不定の「百鬼山姥有明月」三巻・「山うば」二巻やら、黒本の明和六年村田版「福白髪山神の由来」二巻やらへのびてゆく。巢林子は公(金)時の母をからませて、それ以後の山姥物展開の楔点をうがう。山姥の後日譚にしたてた歌舞伎芝居が「長生殿白髪金時」(享保十四年)上演で、富本節所作事として「織殿軒漏月」(宝暦二年)や「山姥四季英」(安永九年)をへて、常磐津節振事の「四天王大江山入」(天明五年)にいたる。テーマといえば山姥の廓話くわわにつきる。つぎに廓話の局面がぬけて、富本節の「母育雪間鶯」(文化三年)とか、清元になっては「月花效友鳥」(文政六年)へ。常磐津節では「四天王大江山入」を<古山姥>とよぶのに対して、<新山姥>の本名題は「薪荷雪間の市川」(嘉永元年)と称している。地唄の「山姥」だけが能本行どおりで、これは山村流ほんぎょうの舞たぎおになってのこっている。

一 クセ謡「…そもそも山姥は、生所しやうじよも知らず宿もなし。…シテ謡「しかれば人間にあらずとて、地謡「へだつる雲の身をかへ、…さて人間に遊ぶこと、あるときは山がつの、樵路にかよふ

花の陰、やすむ重荷に肩を貸し、山もろともに山をいで、里まで送るをりもあり。またあるときは織姫の、五百機立つる窓に入って、…賤の目にみえぬ、鬼とや人のいふらむ。…都にかへりて、世がたりにせさへたまへ、と思ふはなほも妄執か。
(謡曲「山姥」)

— そもそもむかしの山姥は、生所もしらず宿もなく、ただ雲水をたのみにて、いたらぬ山の奥もなし。しからば人間にあらずとて、へだつる雲の身をかへ、かりに自性を変化し、一念化生の鬼女となりて目前にきたれども、邪正一如とみるときは、色即是空そのままに、仏法あれば世法あり、煩惱あれば菩提あり、仏あれば衆生あり、衆生あればこそこの姥も恋をすれ。柳はみどり花はくれなゐの、「色」といふくせものゆゑ、かく恥かしきすがたを見せまゐらすぞかし。…さなきだに山姥も情といふを知ればこそ、あるときは山がつの樵路にかよふ花のかげ、休む重荷に肩をかし、月もろともに山をいで、里までおくる由もがな。われはそれにひきかへ、善をすすむる嫁をそしり、あまつさへこの年まで、色男にほだしをうたれ、煩惱のきづなやむことなし。
(「女大名丹前能」巻六の「老いぼれ恋慕山姥」)

謡曲の「山姥」や「江口」は一休の制作といいつたえ、「卒都婆小町」が高野山宝性院有(看)快がつくるとか(「卯花園漫録」巻一・「世事談綺」巻)。しだいに遊女が妓名として仏・普賢・勢至・薬師・観音・小観音をとなえてくる(「画証」)。それは菩薩行の弘通するのにつれて、恒順衆生・随縁真如へいたるアプローチをしめす(「遊女記」・「新猿楽記」・「長秋記」・「台記」・「二中歴」)。
(「相如集」・「古事談」・「遊女考」→「日本巫女史」)。

—…シテ謡「釈迦すでに滅し、弥勒いまだ生せず。弥陀の悲願をたのまはずは、いかでか仏果にいたるべき。クリ謡「南無や灑濁帰命頂礼、本願いつはりましまさず、超世の悲願に身をまかせて、他力の船に法の道、シテサシ謡「すなはち彼岸にいたらんこと、一葉の船の力ならずや、…

(謡曲「遊行柳」)

と同時に安寿・愛寿・金寿・覚寿・玉寿・千寿・万寿・妙寿・延寿・中寿(のち中將)・少寿(のちには少將)、ともうたう遊女名がかたどる巫道史→神道史をみるにちがいない。ほかにそういうトポロジーとはべつに、ハイライトをあてなければならぬのは、若狭の八百比丘尼のたぐいであろう。八百歳の命縷をたもちつづけたという八百比丘尼は、熊野権現神道の信仰示標であるとともに、巫女としての聖格表象だった招代依代の<椿>をたずさえ、時とところを異にしながらか幾山河ふみわたり、巡歴遊行をこころみていたのである。その行動伝承の時空を超絶して個々の実員を総合し、ついには高次のひとり的人格像へ抽象化させてゆく、といった思惟方法が前代日本の民俗形成をつらぬいていた。もとより霊媒質(ものよし・よりびと)の八百比丘尼が、熊野祭祀教団の配下にいる熊野比丘尼→歌比丘尼だったことは、白子とか白比丘尼ともいわれてきた事跡確認によって否めないところであろう(「中原康富家記」)。いまでは東北地方それもはるか北寄りにしか、すでに残留しなくなった<おしら神>→おしら仏・おしらさまは、さきに結論からいって敵媛→市姫→斎女→巫女→白比丘尼→市子→いたこの勸進土着にもとづくものである。

—…「東海道名所記」巻二にはく、「いつのころか、比丘尼の伊勢熊野にまうでて、行をつとめしに、その弟子みな伊勢熊野にまいる。このゆゑに熊野比丘尼と名づく。その中に声よく、歌をうたひける尼のありて、うたふて勸進しけり。その弟子また歌をうたひけり。また熊野の絵と名づけて、地獄極楽すべて六道のありさまを絵にかきて、絵解きをいたし、奥ふかくおはします女房たちは、寺に詣で談義なんども聞くことなれば、後世を知らぬ人のために、比丘尼はゆるされて、仏法をも進めたりけるなり。いつのほどにか唱へ失なふて、熊

野伊勢には参れども、行をもせず…絵解きをも知らず。歌をかんようとす。…「艶道通鑑」に「歌比丘尼、むかしは、わきはさみし文匣に巻物いれて、地獄の絵ときし、血の池のけがれを忌ませ、不産女の哀を泣する技をし…」といへり。いま説経祭文といふものに、不産女地獄・血の池地獄などとてあるも、絵解きのなごりなるべし。「血の池地獄物語」をよむに、…「勸進聖判職人歌合」に、絵解きといふものあり。その図をみるに、俗体にて烏帽子・小素襖を着、琵琶をいただき、杖さきに雉の尾をつけたるをもち、おのれがまへに画卷のごときものをおけり。絵解きの花の歌に、

見どころや絵よりもまさる花の紐とかうとかじは我ままにして
同じ述懐の歌に、

絵をかたり琵琶ひきてふる我世こそうきめ見えたるめくらなりけれ

(文化十一年刊行・山東京伝著)
「骨董集」上編下之巻後一

熊野唱導が貴賤衆庶の尊信をあつめてきたのは、平安王朝も後半になってからである（「三宝絵詞」・「熊野山御幸」・「愚管抄」・「袋草紙」・「教訓抄」・「拾遺住生伝」・「今昔物語」）。後白河院が三十四度も後鳥羽院は二十八度も、熊野行幸におよぶとき（「本居宣長全集」）。熊野が出雲よりの移動遷座であることの間歴は、神代紀にとどめてあきらかである（「不問談」上・国学院雑誌「熊野学術調査」正統）。熊野三所の本縁はつづさには「江談抄」・「私聚百因縁集」にみえる（「塩尻」）。室町期にはいって念仏講として興隆したのであるが、熊野念仏の展開軸はすこぶる熊野行者→遊行聖→勸進聖→時衆の活動史にまつ。したがって「一遍上人絵詞伝直談鈔」巻一には、「イマ一遍ト称スルハ、熊野権現ノ神勅ノ偈ニヨツテ、ミヅカラ一扁桃ナヅク。…イハニル神勅ノ偈ニ六字名号一扁桃法、十界依正一扁桃体、万行雑念一扁桃証、人中上上妙妙華」という。一遍上人を証誠大師とよぶが、<証誠>とは「熊野の御本地のさうし」に、「…証誠殿と申すは、阿弥陀如来の化身…」と説く。時の人びとが<遊行上人>または<捨聖>とも称した。こういう念仏派の言語芸術の先蹤が「保元物語」・「平治物語」・「平家物語」や「義経記」・「曾我物語」、ずっと焦点をしぼるとき謡曲の「熊野」、くだって浄瑠璃の「五十年忌歌念仏」に「新版歌祭文」とか、謡曲の「熊野」の序列が律文関係でいうなら、河東節や箏曲や長唄の「熊野」へ。散文でなら仮名草子「ゆや物語」また合巻本「熊野御前花見車」（天保二年板・梅舎春鳥）へも。出雲大社から上洛したというけれども実のところ、京都の上下出雲寺御霊堂の勸進比丘尼→歌比丘尼だった、阿国の念仏踊→かぶき踊でも、天台宗からでた熊野行道の引声念仏→踊念仏→歌念仏、それに空也派の鉦鼓念仏・時花念仏、ひいては芸能化した葛西念仏・六斎念仏・天道念仏と、異質のものであるわけではない。とかく伊勢比丘尼と熊野比丘尼とにみられがちな混同は、熊野のエトスが伊勢の分化だったところにある（「長寛勘文」→「塩尻」四六）。そこで本宮は内宮に新宮が外宮に那智を荒祭宮に擬してある。ひとときわ熊野勸進歌比丘尼→浮世比丘尼→色比丘尼の謡いくちが、享保ごろより関西あたりでもてはやされ、ことさら熊野節といわれて長篇の口説歌になり、兵庫口説でさえもそのデフォアメイションといつていい（「好色一代男」巻三<たはふれの歌船>・「筆拍子」巻十・「倭訓栞」・「江戸真砂六十帖」巻四・「寛保延享江府風俗志」・「宝歴現来集」巻五・「塵塚談」上巻・「親子」）。まして室町ごろは本地物がひとしきり流行した時世だったので、熊野本縁譚はすこぶる喧伝されてゆく。御伽草子「熊野の御本地のさうし」は、そういう著名のひとつであろう。

一…この物語は、熊野権現の御本地なり。いちど読みまいらせ候へば、いちどまいりたるうち

なり。この本地をもちひまいらせざるものは、現世にては天狗の法をうけ、後生にては悪道におち、無間の底に沈むべし。御本懐のことはりよくよくうけたまはりて、信心をいたし申すべし。権現へまいるべき力なくは、この草紙を読みてなりとも、居ながら祈るころをなすべし。この子細善悪をおぼしめしわくべし。

南無証誠一所大菩薩・両所権現・若王子・一万の眷属・十万の金剛童子・公卿・十五所の飛行夜叉、東西南北の部類眷属、現世安穩にまぼらせたまひ、後生善処にあらはしたまふべし。南無熊野三所権現、来世にてはかならずかならず導きたまふべし。王子御納受をたれたまへ。南無阿弥陀仏なむあみだぶつ。

弘治二年（1556）七月二十六日、一日にこれをかくなり。

（「熊野の御本
地のさうし」）

刊行は寛永整版本というのだから、社会の要請がどれほどおおきかったことか。のべられている内容は mysticism よりまるで occultism にちかい。絵画化したものには熊野曼陀羅があって、熊野三社をえがいた本地垂迹画の一種に属する。勧進比丘尼は文芸としてなら諷誦し、絵画方式のものだと山野をもってあるき、その生活史の沿革は六道絵の絵解きにあるのだった（「嬉遊笑覧」八四・「塵塚談」三八・「享和雜記」四・「骨董集」下後ノ一・「近世女風俗考」二〇・「寛延雜秘録」）。八百比丘尼が道路の守護神として聖格化され、八百姫の宮や八百姫明神とかいわれている来由まで、遊行回国の伝道にしたがった実践運動への認識から、これには市姫→市女→市子と比丘尼との習合復融がからむであろう。ここで<市>は二重の意味構造をもつ。どこかはるかなところより訪れ臨む、と信じられていた神→聖格者が、異郷の海山のさちをもってきて授け、かわりに地方のみやげを家つとにしてかえる、と考えられている週期ごとの信仰伝承からでて、ついには交易という経済組織の形成工程をたどった。

一 市姫の神の斎垣のいかなれやあきなひものに千代をつむらむ。

（「為頼朝
臣集」）

黄表紙「市土産於多福神」二巻は寛政五年版で樹下石上→梶原五郎兵衛の作品ならびにさしえという。いっぽうで心意伝承として巫女を<いちこ>・<いちこ>ともよぶように、職能にもとづいた神妻の名称付与としての系列がある。<いちこ>（市子）は<いつこ>（齋子）→<いつきこ>で、神前で神あそびをする舞姫をさす。<市姫>は市神（いちがみ→いちのかみ）とも市姫神ともあがめ、これを山神（やまがみ→やまのかみ）とも山姥ともみとめていた。まつるためとくべつの社殿は設けなくても。里のいりくちや道端に自然石なり六角石柱なりをたてる。それで市場ばかりか街頭の守護にもあたる。治水・土木にちなむ人柱伝説にしても、遠くから旅してくる女のピエジョンを追う方則によっている。同類項のメカニズムにからむ比丘尼物語は、世界大にひろがっていて日本民俗学をこえて民族学へ人類学へ共通課題をのぼす。八百比丘尼が白子・白比丘尼といわれるわけは、女性の産血や月経にまつわる血忌・赤火・産忌・赤不浄・白不浄への呪術感覚から。「義経記」巻七<愛発山の事>にかきとめた荒血（分娩時の出血過多）の伝説でも、白山比咩神社の菊理媛命の一件になっていて、この神は産神→姥神→子安神の宗教圏に脈理をひく。菊理媛命のくぐりが「類聚名義抄」には、<潜ふる>というように水呪術の実修用語である。あらち山の山中誕生譚なら人物設定をかえて、「曾我物語」巻二や「浄瑠璃十二段草子」八<枕問答>にみえている。ちかごろでも現に伊勢白子山大聖院観音寺から、子安観音の御影をだしている（共古随集）。この心意伝承をたぐるものには仮名草子「子安物語」二巻がある。子どもの霊のあつまる地境一顯界と幽界とのつなぎめでもあるところ一の神が、「さへ」（塞）の神→道祖神とかかわりあってくる民俗接点にしても、もちろん成立の契機は可能であろうし、それからここは赤子塚

伝説の胎動する場所でもあった。室町このかたかたりつがれた山姥のすがたは、まったく勸進比丘尼→歌比丘尼の試行生態の照射投影とみとめていい。坂田公（金）時やら山中鹿之助とかみたいたいな、怪童子の母おやを山姥とする前提だって、奥山の異常出生譚の与件だった。こういう説話の原型をさぐるなら、水の神の場合であっても山の神の例示にしても、聖母子譚にまでさかのぼって一括できる（高崎正秀博士著「金太郎誕生譚」）。のちほど血と狼ときわめて密接にあつかわれ、狼をめざして山谷の神霊の具象とみたり、また山谷の神霊の神使・使姫として特殊の性格づけをしたりする。これから山岳のあいだでの産の血の禁忌へつながってゆくいっぽうで、狼は山姥の同類か眷属かのようにおもわれてきて、ついには姥と狼とのモンタージュから狼を山姥の化身にして、山間漂泊族だった鍛冶屋の管理にかかる説話像へまとめられ、やがて＜鍛冶屋の姥＞とよぶ狼の頭領物語に展開する（「定本柳田国男集」）。けれどもここで＜狼＞といていること概念規制は、あながち食肉目いぬ科の亜種にかぎっているものではない。古典で詠うところの＜真神＞（「万葉集」巻二の199）：＜大口の真神＞（「万葉集」巻八の1636…）（「枕詞燭」）、「明抄」、東北地方の山村語彙＜おいぬ＞までふくむ筈である（文化六年版合巻本十返舎一「九作「三峰靈験狼助助剣」」）。

一 ひととせ大和路にさすらひ、長谷の当麻など詣でけるついでに、名に負ふ吉野の山のほとりに修行しけるついでに、ある峰の木かげに、わづかにむすびたる庵あり。…

…「わが身はもとながれの女にて、常磐といひしものにてはべり。げにうきふししげきくれ竹の、あなたになびきこなたに枕ならべて、かよふ男多きうちに、なにがしの右衛門といへるかた、わきてころろしあさからず。この世のほかかけてまたなき契をなし、うき身のすゑをもそのかたに、まかせおきはべりしに、たのまれぬ人ごころ、いまさらにはあらねど、…女郎もおほくあるうちに、この男わが傍輩なりし若山といふにあひて、ふかき情をつくしぬ。…

ここにおいてふたりとも慚愧・懺悔し、日ごろのねたましさを語りあひけるに、ただ煩惱の闇にのみまよひて、くらきよきなほくらきにたどりいぬるあさましさ。おそろしくもかなしく、この夜ふたりともにかざりおろして、ひそかにしのびいでけるが、若山は妙吟とあらため、都の嵯峨のほとりに住めば、わらははまた妙安と改名して、このところに住みはべること五とせ、としごろの罪おそろしく、あなたこなたよりかよひこし文どもを集め、三尊仏をみづからはりにしたてまつりぬ。このごろは中将姫の昔をしたひ、かく仏の像を縫にし、いまはひたすら終焉のことばかり思ひとりはべる。」とひと間の仏壇をひらけば、まことはりこの本尊なりし。つたへ聞く証空上人の、普賢菩薩と拝みたまひし江口の君も、かかることにやと思ひいで、…あるじに道の案内をたづねて、人かよふ道にいでぬ。

むかし小野小町が人の執をおそれ、送りつづけし千束の文をもて仏の像をつくり、いまに「玉章の如来」とて男女の道をまもりたまふとぞ。それは上代これは末世に、観世の小菩薩までつくりたてまつり安置しけるは、すぐれたるころろし。まことかかる発心の因もあるものかは、とことさら殊勝におぼえはべりぬ。
（元祿五年版「新百物語」巻三の一＜善提は糸による縫の仏＞付遊女の懺悔咄）

「常磐姫物語」と決して無関係・没交渉ではないものに、常磐御前をとりまく諸伝承の分布とか、「平治物語」・「平家物語」から「義経記」・「舞の本」の文献書誌とか、それに絵巻物「山中常磐雙紙」（伝岩佐又兵衛筆十二巻）がつたわる。近松門左衛門は「孕常磐」（宝永七年八月）以前に、「源氏鳥帽子折」（山本土佐掾正本）をかいしている。以後には「平家女護島」第三段＜常磐館＞を仕組む。

中 塩 清 臣

常盤御前物のレパトリーは判官物（貴公子彷徨譚）の一分野だが、能楽幸若舞では「烏帽子折」・「伏見常盤」（「伏見落」）・「常盤問答」（「鞍馬常盤」）・「山中常盤」，どれでもみな聖母子譚のおもむきひときわしめず。「源氏烏帽子折」第二段の＜常盤御前道行＞から＜宗清館の段＞までの書き替え狂言が、「真玉雪源氏鬘眞」（安政十一年十一月市村座初演）の第一番目三立目にあたっていて、常磐津節の「恩愛蹟関守」（俗称「宗清」）である。さらに「源氏烏帽子折」第二段から一中節へうつしての作曲は、「常盤御前道行」と「妹が宿」とのふたつ。富本節に脚色してなら「雪解松操織」でこれは弘化二年正月の中村座所演，作者が藤本吉兵衛と「近世邦楽年表」にするす。比丘尼発心譚は色懺悔物へつながって、ときには怪（異）談物への説話エネルギーをはらむ。